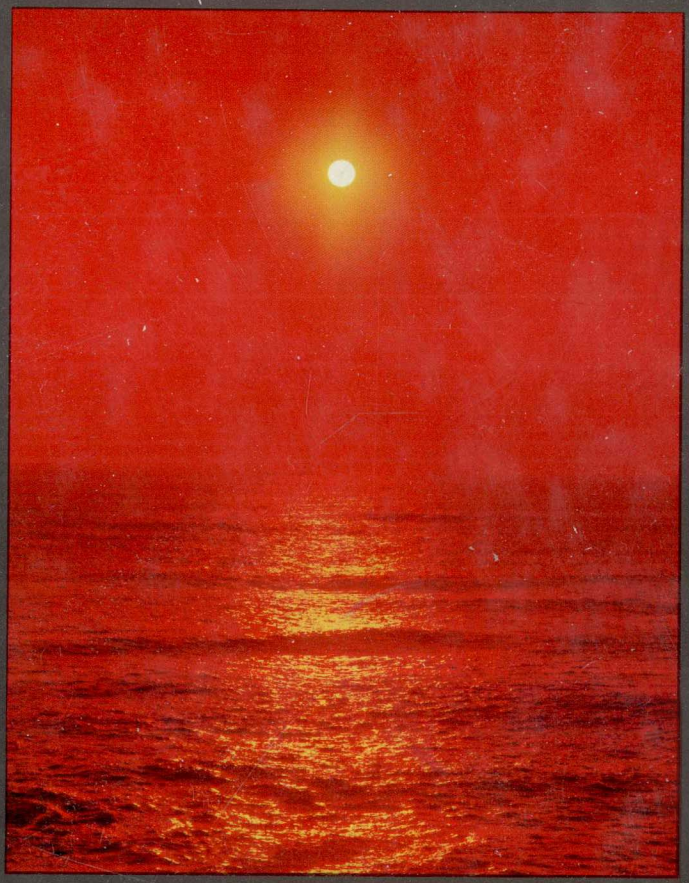
長編小説

風雲に乗る

城山三郎



風雲に乗る

城山三郎

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)
光文社　出版局

長編小説　風雲に乗る　¥850

昭和52年6月15日　四六判・初版発行
昭和54年5月10日　四六判・10刷発行

著者　城山三郎（しろやま さぶろう）
神奈川県茅ケ崎市東海岸北
4-3-12

発行者　小保方宇三郎

印刷者　堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社 光文社
振替 東京6-115347　電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　(関川製本)

© Saburō Siroyama 1977

(分)0-0-93(製)92020(出)2271 (0)
Printed in Japan

風雲に乗る——目次

悪い客 7
金のためには 16
大死一番 30
形影相弔 40
都の人 49
風雲 58
あまい人 69
勤続十一年 78
ランドセル 88
冷たい人 93
旗揚げ 106

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

敏と鈍　113
成績　121
窮地に立つ　127
構想　140
迷い　148
夢の都　155
縁談　163
経営能力　173
左遷　184
波また波　190
新しい鯨　206

装幀　亀海昌次

風雲に乗る

城山三郎

悪い客

炎は夜空を焦がしていた。
すさまじい音とともに、また新しい火柱が噴き上げた。暗い空になお黒く煙が渦を巻き、火の粉が乱れ散る。火照りで着物も燃え出しそうであった。
その中で、鯛公之進は床几を持ち出させ、その上に腰をすえた。幼い公介を膝にのせる。うろたえ騒ぐ女たちを眼にもかけず、その腰は石のように重かった。
家作の一軒の屋根を抜いて、別の炎が立ち上ったとき、公之進はたったひと言つぶやいた。
「よう燃えるなア」
鯛旅館をはじめ、一町全部にわたる鯛家の貸家が焼け落ちようというのに、まるで他人の家でも燃えているような言い方であった。そして、酒をのんだ。
物の焦げる異臭と夜気の中に散った酒のにおいは、子ども心にも忘れられぬほど、強く、あざやかであった。

公之進は、酒豪であった。朝、昼、晩と、三食ごとに二升ずつのんだ。そして豪気であった。酒が豪気を呼ぶのでなく、豪気に酒が呼びこまれていた。
魚屋たちは、酒がはいって機嫌のよくなったころを見はからって顔を出す。
「だんな、今日は鮪に旗魚に目鯛の……」
「新しいか」
「へい、とびっきり」
「よし、全部置いて行け」
「毎度ありがとう存じます」
「ちょうどご飯どきだ。飯食って行け」
荷を悉皆、言い値で買いとったうえ、ご馳走した。一人の魚屋だけではない。三人からでも、四人からでも買った。そのあげく、賄場には魚の山ができる。
客の有る無しにかかわらず、買いこんでしまうのだから、いくら大旅館とはいっても食い切れない。鮪の刺身が大皿に山盛りになって女中たちの前に並べられ、鰤の照り焼きは鉢に盛られて出入りの者に配られた。
公之進はまた、ときどき思いついたように、
「芝居を見に行け」
と、どなった。
たちどころに女中十人が一組になり、羽織をひっかけ

るようにして飛び出す。すぐに出かけぬと、すごい雷が落ちるのだ。その女中を追うようにして、破子につめた弁当を、公之進は人力車に頼んで芝居小屋へ届けさせた。

旅館の経営者という感じではなかった。侠気というか、太っ腹の気分だけがころがっていた。その気分だけで、まかり通って生きている人であった。

鯛旅館と数十戸の家作は、一夜のうちに焼け落ちた。漏電か失火か、原因はついにわからなかったが、火元は鯛旅館にあった。

公之進は、店子からつけ届けがあれば、二倍にも三倍にもして返し、家賃が滞っても、事情しだいで何カ月も忘れたふりをし、引っ越しの荷馬車賃まで立て替えてやるような家主であったので、類焼した店子たちの大部分からは、これといって強い請求はなかった。それだけに賠償には心をくだいた。

旅館の再建も一時見合わせ、まず店子や従業員の落ち着く先を捜した。だが、ごく一部の店子のなかに、法外な賠償をふっかけてくる者もあり、それがまた札つきの滞納常習者であったりして、公之進を怒らせた。

かっとなってどなりつけては、賠償金をつり上げられる。それにこりて、自分をおさえにかかると、今度はまたいっそう大きく爆発してしまう。弱みを見せまいと肩をはっては、そこへつけこまれる。

「酒だ、ミヤ、酒を持って来い」

不愉快な客相手だからと、酒。客に気分を害されたからと、酒。のべつ幕なしの酒になった。

公之進は、そうしたくり返しの中で、みるみる憔悴していった。太い眉、黒々とした髪——壮士のような風貌であったのが、わずかの間に白髪がまじりだし、床についてまもなく、その年の冬、死んだ。

「葬式はやるな。香奠は突っ返せ。それでもまだ持ってくるやつがあったら、孤児院へ回しちまえ。おれはお神酒一升抱かせてくれりゃ、成仏だ」

公之進は、骨の浮き出た肩で息をしながら、なお気張って言った。遺言らしいものは、それだけであった。

四十九日の忌が明けたのは、体の芯まで凍えそうな大雪の日であったが、その日から今度はミヤが寝こんだ。

おそい春が巡ってきた。

ミヤの病状は一向にはかばかしくなく、医者は都会をはなれての湯治をすすめた。いちばん近いのが、飛騨の下呂であった。

下呂の湯は、なめらかで、よく効いた。

だが、湯治を終えて戻ってくると、すぐまたぶり返し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。都会の空気そのものよりも、つき合いのわずらわしさが、ミヤを苦しめた。

公之進を死に追いやった不愉快な連中は、いっそう臆面もなく押しかけてくる。居留守も使えず、追い返す力もなく、向かい合ってしまうと、申し合わせたような長居。みだらな眼で、体中なで回される。

「さびしいでしょう、奥さん。こらえられますか」

焼けたとはいえ、市の中心部に一町にわたる土地があり、ほかにも、いくらか家作がある。欲と色との二道かけて、誘惑にかかる男も二、三にとどまらなかった。

「公介君、しっかりした、いい坊やだねえ。いま、何年生？」

ミヤの前で笑いながら頭をなでてくれた男が、その次、ミヤの居ないとき、

「くそッ、なまいきな坊主」と、こぶしをかためて公介の頭を小突いた。頭にあとがつくかと思われるぐらい、痛かった。男にしてみれば、子どもにまで心ならずもおせじを言ったことが、癪にさわるのだ。

二つのげんこつで、ぎりぎりしめつけられたこともある。

公介は、それをミヤには言わず、眼のふちに涙をためてこらえた。

（ひとりぼっちの母、その母をこれ以上、苦しめたくない）

けなげにそう思った。父親がないとはこういうことなのかと、少年の心にかみしめていた。

（弱い者はいじめられる。それが世の中なのか）

母のミヤは、まだ三十を出たばかり。

くっきりとした富士額、こぼれそうな瞳、やや受け口の唇。

公之進の死後、ミヤはつとめて黒い渋味のものを身につけたが、それがますますミヤの女を引き立てる結果になった。といって、色ものをつけるわけにもいかない。地味なものを新調しようにも、罹災者の眼がこわい。着物一枚にまでくさくさしなくてはならぬとあっては、病気のよくなるはずはなかった。

それに、公之進の剛腹がたたって、「だんなさんのときには……」とか、「だんなさんが約束しといてくださったんだ」とか言って、ねだりに来る客もあとを絶たない。旅館も再建していないので、貯えを食いつぶしていくばかり。

ミヤはそこで、誰にも相談せず、心をきめた。焼け跡の土地全部を売り払い、湯治先の下呂にささやかな旅館を出すことにしたのだ。

当時、高山線はまだ下呂まで通じておらず、焼石から一日四本のバスが通っているばかり。客は少なく、下呂には、まだ旅館らしい旅館はなかった。

ミヤは、益田川を見おろす高台の一画を買い、そこにまず九室の二階づくりを建て、〈鯛旅館〉の看板をかかげた。

「母さんは、死んだ気になってやるのよ。おまえ、わかってくれるね」

公介の耳に、何度もくり返した。

きびしい風土や限られた土地が、そうさせるのであろう。山国の人々には、他所者への警戒心が強かった。共同浴場近くの農家や商家は、間貸しの形で湯治客を泊めていたため、客をとられはしないかと不安がった。

このため、ミヤは開業までに、泣きたいような思いをした。挨拶しても、そっぽを向かれ、訪ねて行っても、口もきいてもらえない。

「あなた、あなただったら、どうなさる」

線香の尽きた仏壇に向かい、ミヤは空しい問いをくり返した。

岐阜と名古屋の新聞に、小さな広告を出した。

公介は、自転車に乗って、中山七里の道すじの木立ちに、短冊型の広告板を打ちつけて回った。三日がかりの重労働であった。手も足も疲れ、ペダルを踏みおろす力もなくなる。だが、

「ぼくがやるんだ。ぼくひとりに任しといて」

ミヤにそう言って出てきた手前もあって、泣き言は言えない。

七里にわたる絶景も奇巌も、眼にはいらなかった。川は、疲れた公介を死の休息へ呼びこみにかかる蒼いよどみの連続に映った。

留と千代という通いの女中二人がきまり、以前からの賄方もそろって、いよいよ開業の日が来た。

十月の半ば、チューブの絵の具をそのまま塗ったように空の青い日であった。

鯛旅館では、朝早くから、廊下も玄関も小糠の袋でなめるようにみがき立てた。バスの着く時刻を見はからい、ミヤは自分で石段に水をまいた。

バス停は、すぐ先の崖下にある。正午近くの一番バスは、砂ぼこりを巻いて通り過ぎて行った。

昼過ぎの二番バスからは、村の人が降りただけ。

いちばん期待していた夕方の三番バスは、山峡にクラクションをこだまさせて、走り去った。

「もう今日はだめだね。ごくろうさん」

ミヤは、女中たちを家に帰した。公之進に似て、ミヤ

には、あきらめのよいところがある。終バスの着くのは、八時過ぎ。新顔の山宿へそんな時刻に訪ねてくる客はないと思った。

だが、その終バスが崖下にブレーキをひびかせて、とまった。幾人か客が降り、それがぞろぞろ近づいてくる様子。公介は、あわてて提灯を持って駆け出した。

石段をおりたところで、その一行にぶつかったが、瞬間、公介はぎょっとした。いくつかの丸坊主が、うすい闇に浮いていた。

公介は、思わず叫んだ。

「お坊さんですか」

「そうだ。旅館をこっちではじめたと聞いてな」

先方は、提灯の字を見取って、

「どう、とめてくれるか。六人だが、部屋はあいてるかな」

「は、はい」

最初の客が、坊さんの団体とは。

公介は、誰かにからかわれているような気がした。情けなくもあり、不吉な気もする。〈坊主〉〈坊主めくり〉〈丸坊主〉——どうも、景気がよくない。

気ぬけした思いで石段を案内してくると、ミヤが玄関にひざまずいて待っていた。

二人で荷を分け持ち、先に立って廊下を歩く。

「お坊さんのお客とは……」

公介が小さくつぶやくと、ミヤは片眼を閉じて、いたずらっぽく笑った。

「ありがたいじゃないか？」

「どうして」

（どんなお客でも感謝しなくては）という教訓でも聞かされるかと思ったら、

「坊主まるもうけというじゃない？　縁起がいいわよ」

公介は、眼をぱちぱちさせて、若い母を見返した。

ふしぎなことに、果たして翌日からは満員つづきとなった。

だが、いい客ばかりとはかぎらなかった。鯛旅館の再開と聞いて、不愉快な男たちがやって来るようになった。師走にはいったある夕暮れ。着流しに腕組みした男が玄関に立っていた。青色の眼鏡をかけている。

靴音に走り出ようとしたミヤは、その姿を見て、あわてて身を隠しにかかったが、

「おかみさん、へんなまねするんじゃねえ」

男は、どすをきかせた声で言った。

川浜と言い、かつての店子の一人。無法な賠償をふっかけて、ひきさがらぬ男である。カフェの経営者と言い、

口入師とも言って、職業もはっきりしない。身持ちが悪く、家賃滞納の常習者であった。年齢は、ミヤより少し若い。

「幾山河越えて、はるばるやって来たんだ。ゆっくり対で話させてもらうぜ」

「でも、今夜はあいにくと……」

「満員で部屋がないというのかい」

「……はい」

「そうかい。めっぽう景気のいいことだな。それじゃ話もつけやすい。どれ、満員御礼のところを拝ませてもらおうじゃねえか」

「そんなことおっしゃっても」

「じゃ、何かい。ここへ立たせたまま追い返そうとでも」

声を荒らげたと思うと、いきなり、そこに並べてあった庭下駄を蹴散らした。ミヤと並んで玄関に居た千代が、悲鳴をあげた。

公介は、帳場から走り出た。

川浜は、くるりと半身を向けると、上がりかまちに腰をおろした。腕組みを懐ろ手にかえる。

「なんなら、ここへふとんを敷いてもらおう。火事のおかげで、すっぱだかで野天の下に寝かされたことを思えば、御の字だからな」

「……」

「あのときは、頼みもしねえのに、熱い目に遭わせてくれた。今夜は頼んででも、寒い目をさせてもらおうじゃねえか」

煙草を斜めにくわえた。

「おい、灰皿！」

旅館中にひびく声で言う。

何事かと、泊まり客たちが廊下に出てきた。旅館という商売が悲しかった。部屋に通すほかはない。

食事になると、千代も留も追い返されてきた。

「おかみさんが酌をしなけりゃ、膳をひっくり返すと言ってます」

「なんだって、そんなにいばられなきゃいけないんだろうね」

ミヤは、両手で頭をおさえるようにして立って行った。

公介は、何度となく柱時計を見た。心が落ち着かない。

川浜は、宿帳をたのみに行った公介に、にやにや笑いながら言ったものだ。

「下呂の湯につかって、お母ちゃんはいっそうきれいになったな」

「……」

「お湯の中にも花が咲くというで。湯のせいばかりじゃ

ねえな。ええ男でもできたんとちがうか」
「……」
「おまえ、いつも、お母ちゃんといっしょに寝てるか。夜中にお母ちゃんぬけ出て行かねえか」
無言で耐えていたことが口惜しくなってくる。
(あいつは人間の屑だ。けど、屑も居なけりゃ、世の中は成り立たんでな)
そう言って笑いとばしていた父の公之進まで、憎くなった。屑なら屑らしく、早々につまみ出してやればよかったのに——。
「お母ちゃん大丈夫?」
五つ年下の妹の恵子が、べそをかいて言った。川浜が来たときから、おびえ切っている。
「大丈夫さ」
公介は筆をとった。
(くそッ、父親が居なくたって——)
新聞の上に〈勝利〉と書き、半紙をとって、やたらに〈勝利、勝利、鯛公介。勝利、鯛公介……〉と書いていった。
女中の千代が、帳場にはいって来た。
「おや、恵子ちゃん、涙をためたまま眠って」
公介は、はっとして、〈勝利!〉の筆を止めた。
また、柱時計を見上げる。
ミヤが出て行ってから、五十分近く経っていた。
公介は、無言で帳場を出た。
(母はどうしているのか。川浜にののしられ泣いているのではないか。足蹴にされ、悶絶しているのでは)
廊下を歩くうちに、体があつくなってきた。
それでも、川浜の部屋へそのまま踏みこまず、そっと隣りの部屋へはいった。襖越しに川浜の声が聞こえた。
「……いいじゃねえか。かたいこと言ったって、仏がかわいがってくれるわけでもあるめえ。生身の人間にかわいがってもらわなけりゃ、この旅館だって、やってゆけなくなっちまうで」
体がぶつかる気配がし、川浜の口調が変わった。
「手荒なことがしてほしいのかよ」
「あ!」
「いいだろう、え」
「よして。声を出すわ」
「出せばいいじゃねえか。出せよ」
「やめて」
「旅館が大事だったら、どうすればいいか、わからねえのか、それに、この体がかわいそうじゃねえのかよ」
「いや、よして」

公介は、襖を両手で開いた。そして、そのまま棒立ちになった。

ミヤに、川浜がのしかかっていた。着物の裾が割れ、青みを帯びた内腿まで見えた。川浜の片手は、ミヤの胸を開いて、乳房をつかんでいる。

公介は、とっさに声が出なかったが、次の瞬間、川浜の体はころがった。ミヤが、隙をねらって、川浜を突いたのだ。

「この野郎」

ミヤはすばやく胸もとと裾を合わせて、公介のもとへ走り寄った。

川浜は立ち上がったが、追うのをあきらめ、その足でいきなり膳部を蹴った。ころがった銚子を、さらに蹴とばす。

廊下に客たちの寄ってくる気配がする。川浜はその客に聞こえよがしに、

「こんなまずいものを食わせやがって！」

ただそのための腹立ちと見せかけようとする。

公介は、川浜にぶち当たろうと思った。

だが、ミヤが公介にしがみついていた。

「がまんするんだよ、公介」

どこにそれほどの力があったかと思われるほどの強い力であった。

連れ戻されて廊下へ出ると、いつのまにか、そこへ恵子が来ていた。新しい涙をまた眼のふちにためて、

「お母ちゃん！」

と、ミヤに抱きつく。

その夜、公介は眠れなかった。

いやな客にねばられてミヤが当惑していたのは、これがはじめてではない。出入りの職人などのなかにも、帳場に上がりこみ、居すわってしまう者もあった。ミヤが遠回しに追い立てにかかると、いやしい笑い方をし、あるいは、声を荒らげてみせるのだった。

父の在世中には、思いもかけぬことばかりであった。考えれば考えるほど口惜しくなる。

（父親に代わる力が欲しい。父親に代わる権威が欲しい）

翌朝、夜の明け切らぬうちに、公介は床をぬけ出た。まわりの飛騨の山々は、まだ朝もやの中に眠っている。

朝もやが静かに流れ、肌を濡らしてきた。公介は、大きく呼吸をすると、鯛旅館のま向かいの山ふところに、黒くひっそり沈んでいる杉林めがけて歩き出した。

神領の一部であったためか、そこには樹齢百年を越すと思われる杉の大木が、亭々と天に向かってそそり立っている。幹は二抱えも三抱えもあるほど太く、灰緑色の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com